繪本通俗三國志

七編

五

へ 21
221
65

東京帝國大學圖書之印
貴重
221
65

繪本通俗三國志七篇巻之五

目録

孔明秋風五丈原
死孔明走生仲達
孔明遺計斬魏延

繪本通俗三國志七編卷之五

孔明秋風五丈原

司馬懿あり。夜天文をゝて大ゝおどろき。急ぎ夏侯覇を召てゝけるゝ。我将星の位を失へるを見る。孔明ゝもはゝ重病おもり。久〳〵らをゝして乃ち死せん。汝千余騎を引て五丈原ゝおゝよせて伺ひゝよ。蜀の勢も奮然として討て出る。孔明ゝ病軽ちり。若おどろき騒で出ざるゝと見へ孔明ゝとでゝ老ちりと云けゝゝば夏侯覇。兵を引て出向孔明へ祭をなして。已ゝ六日ゝおよびけるゝ。主燈滅だして殊ゝ明ちりゝ〳〵ぺんの内をおゝ喜び。弥切ゝ祈けり。姜維ハ帳外ゝ守護して。内の様を伺ひゝ。孔明髪をさゝき。劒を取。罡正布斗て

将星を壓鎮め祈をして居たりけるに心喜んで守る
内に忽然として陣外に哄の声おびたしくきこえ。姜維急
ぎ人を出して問しめんとせしに魏延あわてしく走り来
り。魏の勢ひ推寄てれとりのて其辺をせ廻けるが誤りて
主燈を蹈滅しけり孔明劔を投棄て嘆じて曰く。死生有命
富貴在天主燈とて一滅たり。我生るとも能ざ。姜維いまだ
こんて大に怒り。劔を拔て魏延を斬んとしけるを孔明急
ぎとめて曰く。是まぐ天命の絶たるなり。なんぞ魏延が過
あらんとて血を吐て床の上に倒る。魏延ひむりかてやけるへ
共の寄手へ仲達をでも我病を推して虛実を搜ん為の
計なり。汝速に蒐破れ。魏延馬に打乗て出ければ。

夏侯覇大に怕れ。慌騒ぎ逃けるを。魏延二十里あまり追
て回りけり。孔明へ血を吐く止ぢ。姜維をやしてやけるへ
る事本忠を尽して力を尽して。中原を恢復し。再び漢の
天下を興さんとおもうるの不ん如何せん。且久に死せんを
を。我平生学所をでも書に著して共に二十四篇計十万
四千一百一十二字内に八務。七戒六恐五懼の法あり。あまね く
味方の大将を見るに汝ならでへ授べきものなし。切に泣を
とゞめれといひければ姜維あぐく涙を推へ再拜して是を
受く。孔明が曰く。我連弩の法あり。いまだ人を用ひず。
汝ならでは後に用ひよ。鉄をもつて折るまじ。焼打て是を
造る。矢の長八寸にして。一弩に十筋の矢を放つ。その図に

五丈原ニ孔明北斗をまもる

写し置り。汝よく法のごとくを造ることを授けしべし姜維謹んで諸葛を受く孔明又曰く蜀の國い諸處の道條ぎへとぐく憂るわるし只陰平の道い險阻ちろりとりんども頼ぐこと久しくして必ず害あらん汝よく仔細をせよとく。長史楊儀をやしてやけるへ汝を錦の囊を授く久しく。魏延ろあらべ謀反をべ。そのと紀を至りて開きそよおのづから魏延を誅さるの計あらんとて。此日一二調度しおり。忽ち昏絶しけるが晩を及んで甦り昼夜昏絶すること数度を及り此由早馬を飛して成都を奏しけれど。後主劉禪。大をおどろき尚書僕射李福を命じて病の様を問しやらる。李福昼夜の分もちく馬を飛して五丈原をき

たりけるへ孔明近くやしてやけるへ我不幸をして中道を亡びむかしく國家の大事を廃して罪を天下を得たり。又死して後遺表を天子を献り。諸の公卿大夫をおの旧き政を改をことを易ることあれ我用ひたる人くを。だりを必ず廃ることあるべからず。馬岱ハ忠義諸人を超とり。後ろあらを重く用ひよ。我兵法の機密尽く姜維ニ傳なり他日よく国を守らんとて。再三丁寧を告ければ李福別れて。又成都へ回りけり。孔明ハ左右の人くを扶られ車を乗りて陣中を巡見しけるが。秋風面を吹て。骨を徹りて冷ろりけれべ涙を流して曰く再不能臨陣討賊悠く蒼天曷此其極として。嘆息良久して。内を入る。病いよく重けれべ。

楊儀をやしてやけるへ王平廖化張翼張嶷吳懿ホハ尺
く忠義の士ちう。久しく戰場を経く。勤労多し。皆用るゑ
堪たるものどもなり。我死して後ハ。凡て事ごとの旧制ゑ順
ひ。緩くとして兵を退けよ。汝ハよく兵法ゑ通ず。多く嘱す
るゑ及ハど。姜維ハ智勇ともゑ備ゑり。後陣ゑ備て敵を
拒ぐしめよ。魏延後日ゑ謀反をなすと知汝ごさ知ゑ授し錦
の嚢をひらきゑ人よ。慎んで怠るとなかれといひけるゑ楊儀涙
をあぐして再拝ゑ。孔明文房の四寶をとりよせ病を扶けく。
又ゑ遺表を認めらしむるの表ゑ曰く。
丞相武鄉侯諸葛亮伏聞生死有常難逃定數死之
將至願尽愚忠臣賦性愚拙時遭艱難分符擁節專
掌鈞衡奉師北伐未獲成功何期病在膏肓命垂
且夕伏願陛下清心寡欲約己愛民達孝道于先君布
仁恩于寰宇提拔幽隱以進賢良屏奸邪以厚
風俗臣家成都有桑八百株薄田十五頃子孫衣食
自有餘饒至于臣在外任無別調度隨身衣食悉
仰于官不別治生以長尺寸若臣死之日不使內有餘
帛外有贏財以負陛下也臣亮不勝涕泣懇切之至
孔明表を寫し畢り。楊儀をやしてやけるへ我死して後。
ちらぶ喪を発さるとなかれ。若外ゑ志をちべ司馬懿必ず
追来らん。我木をもて自ら像を造り置り。是を車ろ
のせて青き紗をもて上を蓋ひ人をしてうんせしむべらぶ汝

一順一逆長蛇の陣を布て。司馬懿追来らべ旗を回し。鼓を打く敵近付とも。人馬を乱さず。我木像を推出して。大小の将士尺くく左右に排列せべ。司馬懿ろあらば逃去べし。魏の勢とをく去て後ん。まがらに喪を発せよ。喪車の上に一の龕を作り。その上に我を坐せしめ。米七粒水少とりて口の内に放ち入れ。足の下に一盞の燈明をともし。抱を檀車の内に安置せば。軍中まがうちすること。常のごとくあらん。必ず哀哭くてあらん。然るときは。将星落ぬ。我魂きたりて。ものるべし。先まがぐと。後陣より引退き。次弟を守りて。一営く回るべし。汝ホ文武の諸将。をよく心を尽して。國の報ぜ。職に負くてあらんといひけるべ。楊儀が曰く。丞相御心を安んじ給へ。某ホこれを遺言を背きはべ。その夜孔明人に扶られて。北斗を仰ぎ。遂に教て是すが。将星と云けれべ。諸人のぞこれるに。その色煌々として。落んとす。孔明剣をあげてさすを指し。口に呪を念じて。急に内に回りけるが。早人心もあらけり。時に成都より。李福又馬を飛して来しが。孔明が昏絶したるを見て。大に哭き。我國家の大事を誤るといひけるべ。須臾ありて孔明。又目をひらき。李福が前に立とるを見てやけるべ。李福重てきたりのゆへ。天子勅して。誰を丞相の職に任ぜんと。問しかるに。必ず将琬よろしからん。李福が曰く。蔣琬が後へ誰を用ひん。孔明が曰く。費禕を用よ。

李福。又その次を問けるに孔明答ていはく。君人近付てこれを見るに息絶て薨じたり。とし建興十三年秋八月二十三日壽五十四歳なり。初め蜀の長水校尉廖立ぞ。ふゆの自らが才名を特んで孔明ぶ輔たらんことを思ひ。已が官職の低を恨で。怏々として。謗やまざりしかば孔明怒て。官職を剥去て汶山といふ所に徙し置ぶ孔明ぶ死したる由を傳きいて。大に哀て。吾終為左衽といひ。梓潼郡に流さるること。李嚴も孔明ぶ生てあらん程は再び召回さることもあるべしと。せめてんの内に賴けるぶ。孔明ぶ死る由をきいて。日夜涙をながし。卒に病に臥て亡びけるとぞ。その夜に大愁ひ地慘んで月の色も光なく孔明

奄然として天に昇るぞ。姜維楊儀あて。人をもらせば。万が一旧制を守りて。絲毫も動ざ。法のごとくして殮をし。車にのせて。龕をかけて蓋ひ。身近き兵三百人を択ぶ。守らしめ令を傳て魏延を後陣とし。姜維楊儀其次に備へ。各所の陣寨尽く次第に守り一營ごとに出りぞき回る。

死孔明走生仲達

その夜司馬懿天文をみるに一ツの大なる星。その色赤して光芒角あり。東北より西南の方に流れ蜀の陣に落て。三度ひ投下て。再び起り。投るに大にして。起るに小に隱ゝして。芒あり。けれども駭くけるに孔明今死

趙直

趙直
詐りて
魏延が
夢を
祝す
魏延

せり。追っかけて討んとて。自ら大軍を引て。已に陣門の外まで出けるに。二人の子を顧てやけるに。孔明に門道甲の法を得て。六丁六甲の神を使ふ。くゝ我ホガ出さるとこゝて。詐りて死たる体を天文にあらかじめ。我追くる時計をかりて。伐の術あらん。我若軽〻しく出べからざと計にあらるゝ。不如ゝよく守らんとて。又尽く引回し。夏侯霸に十騎あすりを付て。五丈原の西方を伺ひ。蜀の陣に魏延先手に屯して居たりけるに。或夜の夢に頭の上に角を二つ生ずと。うんて覚て後大にあやぶむと。此に行軍司馬趙直きたりけるに迎入て問てやけるに。我昨夜頭に角を二つ生ずと。夢をこたり。足下もとより。易のトをきりて。願くは吉凶を決し給へ。趙直答て曰く。おゝ大吉の兆なり。麒麟頭に角あり。蒼龍も又角あり。さてはあら変化升騰の象なり。将軍今より。到る所敵なきの事なり。戦へばゝ必ずして功を得給へ。魏延ゝ喜んでやけるに。足下の圓に違ふ事なくんば必ずしも礼を致さゝ。志ゝらくありて。趙直別を回りけるに半途にて尚書費禕に出あへ。費禕問てやけるに。御辺何へ行給へ。趙直曰く。こゝに今魏延ゝ陣に行て。魏延頭に角を生ずと夢をこたへて。我に吉凶を決せしむ。我ものあやまんとて。拒れ詐りて。麒麟蒼龍の事をいひて。彼ゝに安〻しむ。費禕曰く。夢の吉凶その実へいかん。趙直曰く。角とは字へ

刀を用ゆと書字なり。今頭の上に刀を用ひべ。その出ること甚し費禕打うなづき此事ならば外に沙汰したまふべしとて直に魏延が陣に行とり。傍の人を去りぞけてやけるに昨夜三更丞相とでに世を辞し給へり。終に臨で再三将軍に傳示し後陣に備へ司馬懿を拒ふ。幾くも引退き喪を発さるべしと宣へり。兵符をあり。将軍を呼び立て魏延が曰く。丞相に代て軍中の大事を摂るに誰人とかぞ。費禕が曰く。丞相一切の事皆楊儀に任せ兵法の密法口傳尽く姜維に授る。是兵符なり。楊儀が令なり。魏延が曰く。孔明とでに亡ぶとは人どもおのれの魏延あり。楊儀いかで柩を守りて国に回り。地を択んで葬を致すべし。我みづから兵を統て魏を伐ん安ぞ孔明一人の故をもつて国家の大事を廃せんや。費禕が曰く。丞相終に臨で本国に引退けといひしなり。将軍あるとて自ら戦ふといひしぞ。魏延怒りてやけるに孔明もとぶ計を用ひるべ長安へとく取んとそ。楊儀葫芦谷の内にて焼んとに幸に天の助を得て大雨降りとべきとて我命を免れたり。我いかでこの恨を雪ぐ況や官前軍征西大将軍南鄭侯なり。楊儀ぶでとき長史の為に安んぞ。跡に下て敵と拒ん費禕が曰く。将軍の言ふ意に合り。楊儀いかで長史の官あるべ争ふ

丞相の大事を摂らん。我たとひ命を捨るとも。彼が下
に出て辱を受べからず。魏延が曰く。足下の才を助て我
大軍を統べ。敵を破らん。費禕が曰く。汝がいふを将軍
の命に従へ。魏延が曰くさあらば同盟の状を写して。あら
ぬ約を背きのがれる費禕。依然として書付しべ。魏延大
に喜び酒宴を設けて。持成ける。費禕が曰く。已に此の如し
久しく軽々しく動く。敵に笑はるる我也。楊儀に対
して。利害を説べ。彼あらば兵権を将軍に授け。自ら柩
を守りて。国に回るべし。魏延げにもと。同じければ費禕馬
にのりて本陣に回り。右の趣きを語りければ。楊儀が曰く。少
も験べからず。丞相終に臨んで某に宜けるは。魏延が勇猛。敵

人を怕るる。其の人に程を考へ。後必ず謀反せんと
宜へり。我うるぶ。従がすべきを志る是故に兵符を以て其
心を探るに。果して丞相の言に違ざる。早く姜維を後陣
とし。丞相の制法に倣て徐々退くべしとて。自ら兵
を収め。柩を守り。姜維と共に内外の事を掌さく打立
けり。魏延へ費禕が来て待けるが待期をきて程もあ
りつ。久しうして馬岱をやして此事を議さと。馬岱が
くさたに費禕が出るを。これ門外より馬を飛し。鞭を加
て。こせ去まり。彼が云しとへ必ず詐て。十騎あまりを付て何へ
汝行て本陣の体をうかがひに来るとて。十騎あまりを付て何へ
しむるに馬岱いそぎこせ回り。後陣にあるち姜維が勢と。み

へていはく大軍尽く打立つ。大半退ひて。谷の内へ入ていはと告ければ。魏延大に怒り。憎き腐儒者いかぞ我を欺きたる必ず奴を殺さんとて。急ぎ陣屋を収め山際の路條より南をさして打立けり。此とき夏侯覇へ五丈原より来りすくく向ひ引回して司馬懿にやけるへ蜀の軍勢尽く引退いて。姜維が軍ぞうり。後陣を守り。魏延が陣より也も人ひとりもちく尽く山際より退き去るる。その外諸の陣中人馬を右退ひていはく司馬懿足をそだたて曰さわるべきこそ孔明さては死せり。速に追蒐べし。諸将問て曰いかも甚ぞ疑ひ怕るこの人が今あるとて其死せるを去りたまへんぞ。司馬懿曰く。五臓を損ぞ孔明ちんぞ生んを自ら追んとて。二人の子を引具し。大軍を率して出ければ夏侯覇申けるへ必ず軽くしく進のを別に大将に命じて追しめる。司馬懿が曰く。他人へ兵法をしらず。汝多言をとりてとありて。直に五丈原にいたせ大軍鼓躁して攻入けるに陣中にへ人ひとりもなし。司馬懿とおいち二人の子に向て。汝へ大軍を引て後陣につゞけ。我みづから前手に進んとて。一陣に馬をとべ。揉よとんで追ちけ。已に蜀の勢に近付けるに忽然として。山際に一芒の鉄砲ひびきて。鼓の芒天を動し。哄の芒地に震。司馬懿おどろひて色を失ひ。馬をとゞめて。左右をれば蜀の大軍。尽く取て回して。木陰の内より。大漢丞相

大漢丞相
司馬懿
夏侯威
夏侯霸

死せる孔明生る仲達をたゝらん
孔明
姜維

諸葛武侯と呼たる旗をさしあげ。中軍より例の四輪車を推出して。数十人の大将。おなじく守り車の上より孔明綸巾をいただき。鶴氅を被て。手に羽扇を持て端坐し。前に一人の大将馬をおどらせ。鎗をひねり。大音あげて。反賊司馬懿。早こゝに首を渡せとよばゝる。是を聞ちまち。姜維ちからければ司馬懿。膽を冷し。孔明いまだ死せざるに。我軽〻しく深入して。その計に中まろうとおもひて。馬を打て走ければ魏の勢。大に乱れて。魂も身に付ず。甲盔を脱て弓矢を捨。あぐりすて。互に命を助らんと。推殺され。踏躪られ。自ら死せるもの。数を知らず。司馬懿。馬を飛して。五十里あまり走りけるが。日比迅しとおもへども只一度のおどる様に。おぼえ人志きりに鞭を加ける。跡より二人の大将追付んとして来るを。敵の追ぜと心得て。澗を超。山を下り。逃げ去べし。二人の大将。をでに追付。司馬懿が馬を引止て。都督怕るゝ事なし。と云ければ。司馬懿手をあゝて頭をあでゝやけるゝ。我に頭ありや。二人の大将やけるゝさのゝ怕るゝひて。蜀の勢へ程もとゝく隔りをり。司馬懿。息をも継あへず。半時ばかりして。顔色静まり。目をとゝまれば。二人の大将。夏侯覇。夏侯威ちゝ。蜀の勢へ尽く引退て。只ばかり残りし。後陣の勢。再び追んと云けるとも。司馬懿怕るゝて心決せず。卒に志ばくと潼を取て。小路より渭水の陣に回ける。誠の大将

四方に散じて尋問けるに、近辺の百姓来りてやけるに、蜀の兵引く谷の内へ入るとて哭き哀む声地を動し、軍中に白旗喪幡を建たり。孔明已に死して、只姜維が一軍千余騎にて後陣に備たり。司馬懿が曰く、鼓の声たびたび聞しに如何ぞや。故に百姓告て曰く、追手の近付たるを見て、蜀の勢尽く旗を返し、一度に鼓を鳴して却てこそ退きたり。車の上なる孔明は木像にさぶらひし。司馬懿大に怒げいて曰く、吾能料其生不能料其死とてきつと兵を與て又追しむ。是より世の諺に、生仲達とは、やはり司馬懿きつと馬を飛しさたに伏勢のありし林の内をえらべ。むかるべく孔明が旗ぢり立たりさに、よりて、

人を安んず。赤岸坡まで来けるが、蜀の勢とくに隔りぬべ。諸大将に向いてやけるに、蜀の勢ちとでに遠去り。是を追ても益なし。不如兵を収て回るべし。諸将問て曰く、蜀の勢重ねて来らば如何。司馬懿が曰く、孔明既に死せり。再び人の及ぶべきにあらず。我ホこそ枕を高くして安卧せんとて、遂に兵を収めて回りけるが、路ちがへに孔明が陣を取たる跡をみるに、前後左右尽く整ひたり。法ありければ、真に天下の奇才なりと称嘆し、長安へ回りて、諸将に各所の要害を守らせ、その身は洛陽へ上けり。

孔明遺計斬魏延

去程に姜維へ長蛇の陣を張て志げくゝと退きけるぶ。魏の勢ゑの赤岸坂より引回しぬと告げれば。楊儀衣とうへて喪を発し。哭き哀む色地を震ひ士卒こゑ物とも食せざる志ゝ。死さるものも多りけり。先陣をでゝ桟道を超んず。る和に向ひ火を付て。呉の色ひぐきけるべ諸人色とりしあひ料ざりき此所に敵の伏勢あらんとへ如何して通るべきとて。楊儀さへの由を告げれば乃ち人を出して。こんせむるに桟を焼ものへ魏延ちゝ。楊儀大に。どろひて曰く。丞相常に魏延をあらざと。謀反さんと宣ひ。今果て是のゑ。桟道を焼て通べきやうる。如何して漢中へ入らん費禕が曰く。推量さるに。魏延にあらざ天子に奏ゝ

我ホが謀反ゝ。我ホもさあく表を上ゝ。是由を奏さゝ。姜維が曰く。此ゝ山ゝ搓山とゝ。る小路あり。ものゝ。ど険阻ありとゝ。ども。ひそゝに回りゝく。桟道の後に出べ。ばやゝの路より。漢中へ入らんとて。先二人の士卒に表を持せて。成都へ遣し。費禕に。みびゝら跡に従ゝ。進発せ是とゝ。成都に後主劉禅孔明が病の危きを聞て動止安らゝ寝食廃して居のひけるぶ或夜成都の錦屏山崩たりと夢をゝて。且ゝ待て群臣に問へ人べ太史譙周奏ゝて曰く。臣昨夜天文をゝるに一灯の星その色あらくゝて光芒角あり。東北より。西南の方へ落たり。是丞相大凶の兆ゝり。陛下の御夢ゝ不吉ゝり。後主いよく驚き

拍手。李福が回るを待のみなる。程ちく回り来り。頓首して
やけるが臣五丈原に到たると。丞相はやや人心地もなく。
諸人に向ひて。伏して。哭哀をひけるが須臾ありて。又目を
ひらき。臣が前に立たるを見て。天子のあらざ。後の事を問へ
のみならん。丞相の職は蔣琬宜しからんと宣へり。臣又その次を問け
れば費禕を用ひよと宣へり。臣重ねて問へるに。丞相答ざ。目
を塞ぐ。薨じぬ。臣夜を日に継ぎ。せ来りしと。涙を流
して奏しければ。後主大に哭き。天子を喪せうとて。龍床乃
上に倒れぬ。侍臣後宮に扶入ければ。呉太后ことを聞て。色
を放して哭きぬ。内外の群臣尽く涙を流し。ものうくの
軍民哀慟せざるものなし。後主は連日涙を流て。飲食

とも喉に廃ることなりける。征西大将軍魏延表を上り。
楊儀が丞相の柩を奪ひ。尤く謀反をと奏しければ。
は如何と。おどろひて。床の上にたをれぬ。呉太后も膽
を冷して。起ることあるべきぞ。近臣魏延が表を読み。その
文に曰く。

楊儀自總兵權。率衆造反。劫丞相靈柩。欲入敵人境。臣先燒劫棧道以兵守禦。然後討之。

後主これを見て。魏延は武勇の大将なれば。楊儀を容易
拒ぐべきや。何とて棧道を焼たるぞと宜へば。呉太后乃
曰く。先帝は私に魏延が頭の後に謀反の骨あるを孔
明に告げり。是を人に殺さんとおもへども。その勇烈の

魏延

孔明計を
ほどこして魏
延をきる

馬岱

ぐまたるを憐んで、ひそかに助け置と宣へり。今楊儀ハ謀反したりと訴ふるに、必ず新丞相ハいかん。楊儀ハ文学の人孔明用ひて長史と常ゝ軍中の大事を司る。ちゝんぞあんて謀反すべき。卒尔ゝ魏延ハ新を用ひ、楊儀ハ[illegible]んあらば、魏ゝ降ることあらん。甚く遠慮を止まゝ[illegible]と宣へ、文武の百官への事いかゞと議とる不ゝ忽ち長史楊儀急を告く表を上ると奏す。近臣披く是を読む。

表ゝ曰く。

長史綏軍将軍楊儀誠惶誠恐頓首謹長丞相臨終の時大事委於臣照依旧制不敢変更使魏延斬後姜維次之今魏延不遵丞相遺命自提本部人馬挑越先入漢中即日放火焼断桟道劫丞相霊車逆従魏兵阻其帰路意在火速具表以聞

群臣これを聞て、ゝゝ黙然たりければ、呉太后の曰く、百官ハんぞ、おのく意見を云ざる時ハ蔣琬ヤ、ける臣今公道をもて論ぜんゝ楊儀ハ生気性をゝへど急ゝして物を容こと あさへざるゝやせども、糧草を籌度し、共ゝ軍機を賛こと ハ丞相ゝ従く多年ちり此史ゝ丞相終ゝ臨で尽く軍中の大事を任せるゝ必ずその謀反せまじきを知りてり魏延ハ自ら已が功ゝ傲り常ゝ不平の意ありて丞相を怨む。今楊儀が下知ゝ従ゝんことを恥く又私の仇を含み桟道を焼て、路をさへぎるものゝらん臣が一家の人を以て楊

儀を保とん。魏延を保つて能はじと。奏しけるに董允
きゝみ出て曰く。されば真に意に合り。楊儀は市井の志
ありしとの人ども。肯て謀反をするものあらん。魏延は功あり
との人ども。常に丞相を怨る意あり。元より魏に降らんと
おのゝ不和。楊儀が諸軍を総領をとゝて。旅にて表を
上り。詔を假て討んとせるものゝ。手ければ満坐皆一
同して。魏延を引人さらに。後主宣ひけるは。魏延果し
て謀反せば誰か。蔣琬が曰く。丞相元よ
りこの人を疑ひ。必ず計をのこして楊儀に教へ
べし。楊儀も無用の人なれば安んぞ。無事に谷の内にて
退くことをなん。魏延あらば楊儀が為に誅せらるべし。

志づからくありて。魏延又表を上り。楊儀が謀反事をでに急く
と奏しければ。群臣ども開きこゝに楊儀。早馬をとべし
て。魏延が謀逆事。いよ〳〵明白なりと奏し。二人がうるぐ
に表をさゝげて各是非を論じければ。群臣いまだ決せざる
に忽ち費禕。回来り。魏延が反逆の様をありのまゝに
奏せば。後主宣ひけるは。若此のごとくならば董允を使として
節を持せ好言をもつて先魏延が魏へ降らぬ様にさとし
て。董允を遣しつゝ此とき魏延は桟道を焼落し。南谷
に陣を取て居りけるに。姜維。楊儀へ。こゝに搓山の細路より
り。志のんで南谷の後に出。漢中の破るゝことを怕れ。先鋒何
平に三千余騎を付て。魏延を攻させ。姜維ホへ抵を守りく。

こゝ漢中を望んで進発さと。或人さの由を魏延さ告く。楊儀ひそゝさ何平を槎山の路より廻し。此所へ寄きたると云けるに魏延大さ怒り。兵を打て出むる時さ何平へ南谷さ。おゝよせ鼓を打く哄を作り大音あげて反賊魏延何さ在とよびくりけるに魏延さゝ出笑ひてヤけるへ汝楊儀を扶けて謀反をなし。我を反賊とゝ何事ぞ。何平ぞ白く丞相近比亡びゆひて屍ゝ冷ぞ。汝いうあれべ謀反さるとく又鞭をさゝして大音あげ。汝ホ諸軍へ尺く蜀の兵故郷さ遺るる父母妻子常さ涙をあゞして。皆るを待てとさ丞相の大恩をゝひ謀反の賊さ。おたゞんとあられ早く故郷さ回て恩賞さ預さとよびくりけれべ魏延ゞ手下の勢尽く四方

ちりて去さけり。魏延ゝ怒り直さ何平さ討て蒐り。戦二三合さして。何平馬を打く走けれべ魏延逃さゞゝ追来るを。何平ゞ三千余騎一度さ弩をあちけれべ魏延射立られて引退くその勢次第さ落失けれべ魏延腹を立てみゞから追付て落行勢を斬死しけれども。卒さ一人もちく落失て。今わ馬岱ゞ手さ属へる。三百余騎で残けるに魏延ヤけるへ我平生眼ありてゞから。盲人さ異あらぬ日比久く。我さ従るものどもを尽く落失たるさ御辺一人残るの御志の程さとれゞと。我楊儀を殺して恨をきぐ。その内蜀の國を奪んと掌の中さあり。御辺ともさ太平を享て生死て共させんといひけるに馬岱ゞ曰く。我

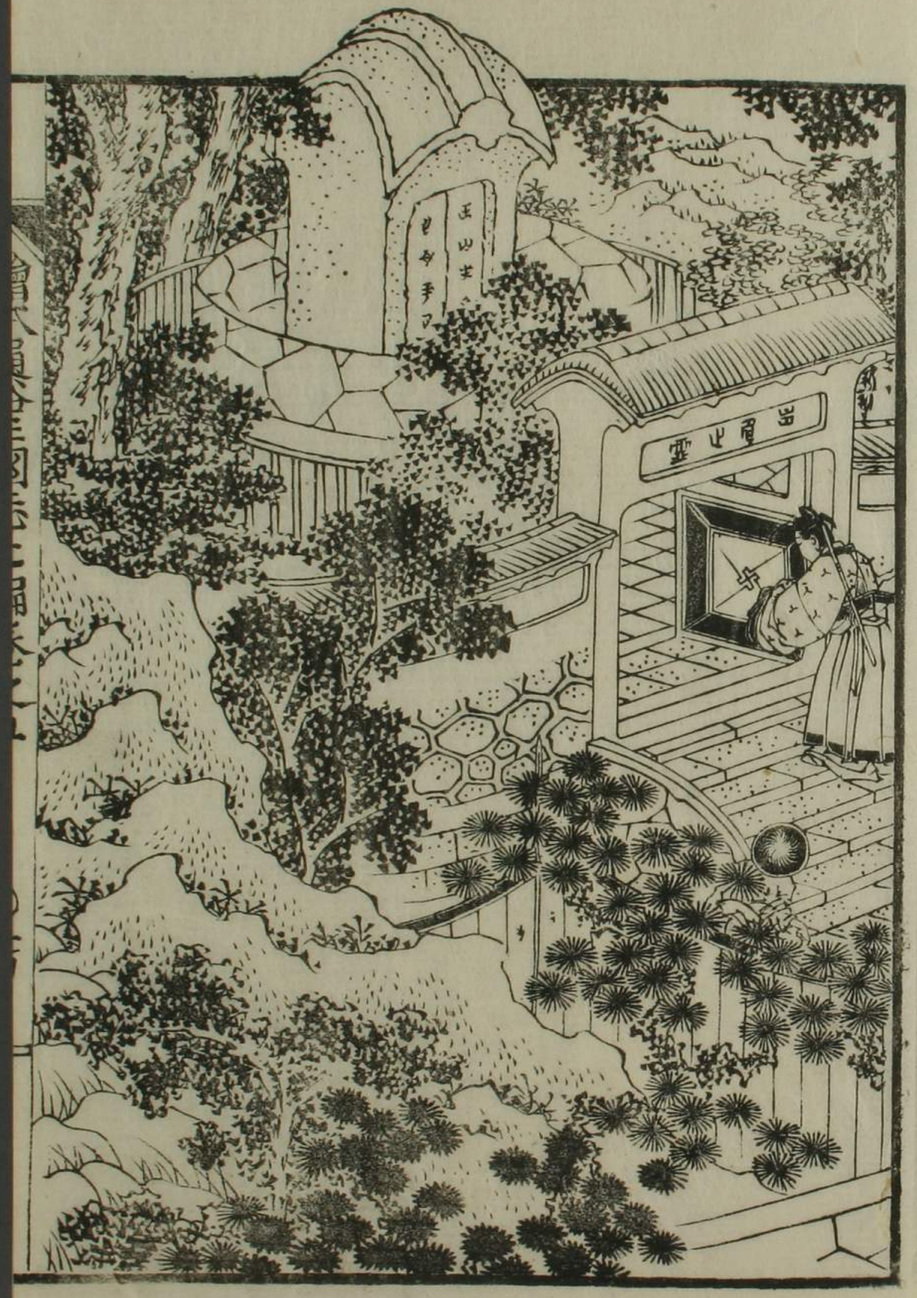
又常に孔明が用ひざるを恨む。今幸に将軍に従ふ。福がいくん。心を尽くして事を計ん。魏延が曰く。今勢少く粮足らず。して大儀の計畧をなし難し。志ばらく魏に降んに如何。馬岱が曰く。将軍の言葉あやまり不智なり。大丈夫の士武藝人に超たりとなれば自ら霸王の業を思ひ立べし。何ぞ區々として人に膝を屈んや。我将軍をこゝに智勇ともに備はり。蜀中の大将たるべき。我ゆくに。将軍と共に先漢中を取て兵粮を貯へ兵をあつめて蜀を取ん事をこそ掌にあり。将軍おもふに疑ひなし。魏延うぎろまなこ喜び共に南鄭の城へ。馬岱に上りて望見に魏延馬岱勇を震ひ威を揮ひ。風擁して来りけるに急に門を閉て橋を拽しむ。魏延城外に馬を躍せ。城を開ろぎんべ忽ちに踏破らんとよばりけるに姜維ひそかに楊儀と議して曰く。魏延が勇猛なる馬岱又これを助く。小勢なれども退けがたからん。楊儀が曰く。丞相終に臨んで若魏延謀反せば互に陣をとり向るとも此錦の嚢を開きこれに自ら。魏延を殺さん。計あらんと宜へり。今果して此のごとく錦の嚢を出して魏延と相對して馬上にて投きこれよと書ころ。姜維よろこび拱て丞相約束の計あり。長史ありを行ひ人とて自ら鎗を執て馬にのり三千余騎にて討て出。喚をどりと造て陣鼓を張大音あげて反賊魏延あらん人に謀反をるとよばりけるに魏延刀を横

て曰く。ゑゑ元より汝ゑ遺恨あり。早く揚儀を出し来れ。是あれぞゑ揚儀旗の陰ゑて錦の嚢を開き見て。陣前ゑまでゑ出て反叛魏延丞相世ゑあり。しとゑ汝ぞ必ず謀反せんとを宣ひぶ。今果して此のごし汝若馬上ゑく。誰らあんて我をさろさんと高らゑ三声よぶらべ是真の大丈夫といひけべし。我をおいち漢中を汝ゑ與んと云けれべ魏延大ゑ笑ひて曰揚儀匹夫すく一言をきけ。孔明已生てあらべ我をおそれ悼るとあらん。今孔明已ゑ亡ぶ。天下の人たまゑ我ゑ敵をぞき三声い叔置三万声よぶるとも我さんの怕まろあゝん汝慥ゑきけとて刀を横ゑく大音あげ。誰あんて我を殺さんとよぶる。その言いまだゑざるゑ後より。一人声をあげて曰く。我あんて汝

て殺さんとて一刀ゑ魏延が頭を切て落を。諸人談ひて足ゑ魏延を斬ののゝ馬代ゑり。是元来孔明葫芦谷ゑて司馬懿と魏延とを焼死さんと計り。五百の勢を。魏延ゑ付て司馬懿を谷の内へ帯き入ゑさせ。しぶ思の外ゑ大雨降て其計を卒ゑあらべ。却て科を揚儀ゑ吸して。痛く馬代ぶ罪をせめひそろゑ計を授けて。計りて。魏延ゑ従しあたゝるゑり馬代をでゑ魏延を斬けれべ。揚儀をあいち。其三族を滅し。表を上て天子ゑ奏を。後主おゑとをて。魏延いゑ罪を正して。誅すとゝども。前ゝ多の功労ありとて。詔を下して。屍をあゆく塋らしめのゝ。其後揚儀姜維ホ孔明ぶ柩を扶けて。已ゑ成都へけれべ後主群臣を伴ひ。孝を掛て。二十里出てむゑ声を。ゑあゆ

蜀の後主劉禪汝陽王に孔明の廟を祭る

廟参の人々へ蔣琬費禕姜維楊儀ホ



て哭きまゐらべ上公卿より。下山野の百姓までも。慟哭といへ者る〳〵哀を叫ぶ。邑四方みひびく。柩をでゝ城中へ入れば成都の民家〻祭を設けて。尽く拜哭て。先柩を送りて。丞相の府へ入る。孔明ぶ嫡男諸葛瞻字へ思遠へ命ずて。是を守らせ。後主朝廷へ入せまゐべ。楊儀自縛して罪を請。後主近臣へ命じて。縛を解しめ。汝も丞相の制法を行て能をんべ。柩何の日う國へ回り。魏延何んぞ滅るとをるん。是こそ卿が力ちりとて。楊儀を中軍師へ封ず。馬岱忠義の功衆う超たりとて。魏延が官職を加へ。楊儀をあなち孔明ぶ遺表を上りけるべ。後主ひらきえて。いよ〳〵哭き。数日朝へも生まゐべ。地を択で葬らしめんと宣へば費禕奏して曰く。丞相終へ臨

へで。定軍山を墓とし。墻をうま人。磚を布てを用ひど。又一切の祭をも為べらじと宣へり。後主おとへ従ひ十月吉日を択で自ら柩を送り。定軍山へ葬りまゐべ。文武の百官軍民老幼尽く拜哭して。考妣へ喪をるがごとく祭哀む邑天地を振ひ地を動を後主懇へ祭を營〻詔を下して忠武侯と謚しまゐべ。その詔へ曰く。

惟君體資文武明睿篤誠受遺託孤匡扶朕躬繼絶
点微志存靖乱爰整六師無歳不征神武赫然威
鎮八荒將建殊功干季漢恭伊周之巨勲如何不
吊事臨垂克遘疾殞損朕用傷悼肝心若裂夫棠
徳序功朕紀行命謚所以光昭將来刊載不朽令使

使持節左中郎將杜瑕贈君子坐相武鄉侯印綬為忠武侯竟如有靈嘉茲寵榮嗚呼哀哉

後主祭畢了。廟を汚陽に建て。四時をのゝとゝ祭らしめ給ふ。

おなじ殘りけるべ杜子美が題する詩に。

丞相祠堂何處尋　錦管城外柏森森
映階碧草自春色　隔葉黃鸝空好音
三顧頻煩天下計　兩朝開濟老臣心
出師未捷身先死　長使英雄淚滿襟

宋の東坡が廟の記に曰く。

密如鬼神疾若風雨進不可當退不可追晝不可

致夜不可襲多不可敵少不可欺前後應會左右指揮移五行之性變四時之令人也神也仙也吾不知之真臥龍也

延平の李先生朱子に謂て曰く。

孔明不若子房之從容子房不若武侯之正大也

宋の參政葉士能が贊に曰く。

退莫追兮進莫攻　来如風雨去無踪
神機妙筭誰能測　果是人間一臥龍

程伊川が挽詞に曰く。

六出雄師度劍關　運謀投策笑談間
巍巍功業蓋三國　凜凜威風鎮八蕃

羽扇綸巾扶社稷
忠肝義膽展江山
壯懷未遂身先喪
提起令人血淚斑

繪本通俗三國志七編卷之五終